

富士山に挑んだ外国人列伝② ～ヘンリー・フォールズ～

＜静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 准教授 井上 卓哉＞

当センターでは、江戸時代から明治時代にかけて、富士山について見聞した外国人による記録が所収された書籍の収集を進めています。2024 年 6 月 1 日に公開した「富士山世界遺産コラム〈vol.25〉」では、アメリカ人ジャーナリスト・英語教師であるエドワード・H・ハウスの“Japanese Episodes”(1881)から、明治 3 年(1870)の富士登山について取り上げました。今回のコラムでは、ヘンリー・フォールズの“NINE YEARS IN NIPON : SKETCHES OF JAPANESE LIFE AND MANNERS”(『日本の 9 年間: 日本人の生活と慣習の素描』)(1885/London)をご紹介します。

ヘンリー・フォールズは、1843 年にスコットランドに生まれた宣教師・外科医師であり、明治 7 年(1874)にスコットランド一統長老教会の宣教師の一人として来日します。来日後には東京築地の居留地に居住し、同地に健康社(Tsukiji Hospital)という診療所を開いて医療と伝道に従事しました。また、在日中には、楽善会盲訓院(現在の筑波大学附属視覚特別支援学校)の設立にもかわり、日本における盲人教育の開拓者として知られています(重久篤太郎 1968)。さらに、エドワード・モースによる大森貝塚の発掘に参加した際に、縄文土器に残された指紋に興味を持ち、数千もの指紋サンプルの比較研究をもとに、日本からイギリスの科学雑誌「ネイチャー」に投稿した論文は、科学的指紋法に関する世界初の論文とされ、以降指紋が個人識別に応用される大きな契機となりました(鈴木力二編 1965)。



写真1 ヘンリー・フォールズ
(筑波大学附属視覚特別支援学校所蔵)

ヘンリー・フォールズは、明治 15 年(1882)に一時帰国しますが、帰国中に日本で見聞したことをまとめて出版した書籍が、“NINE YEARS IN NIPON : SKETCHES OF JAPANESE LIFE

AND MANNERS”です。そのうちの 9 章と 10 章は、“Pilgrimage to Fuji the Peerless.(比類無き富士への巡礼)”と題され、以下のように東京から富士山への旅の状況が記されています。

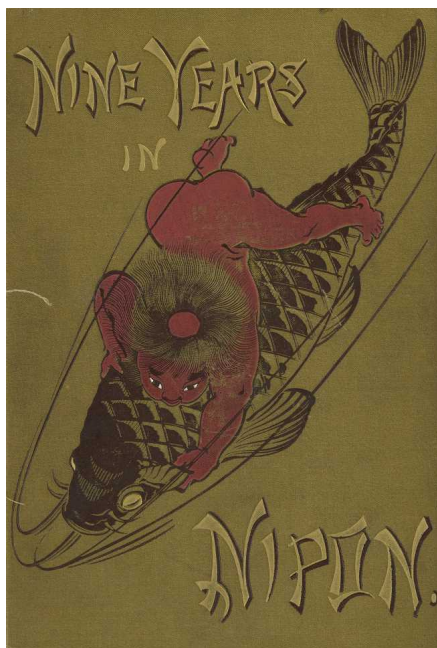


写真2 『NINE YEARS IN NIPON』表紙

7 月下旬のある日、ヘンリー・フォールズは二人曳きの人力車で富士山に向けて出発します。築地から皇居、イギリス大使館を経て甲州街道へと入り、初日の宿がある府中へと至ります。府中での夕食では、鮎と芋と茶、そして醤油が出されたようですが、イギリスのある著名なソースメーカーが当時醤油を大量に輸入してソースに入れているとの噂があると述べています。なお、ヘンリー・フォールズによる記録では、こうした行程や旅先での出来事だけではなく、道中の町並みに加えて、研究者ならではの視点で、街道沿いで育てられている作物や自然環境、発見した花や昆虫類について、詳細に記されています。

翌日は米とココア(輸入品)の朝食を食べた後、多摩川を越えて八王子、川原宿に向かっています。ここでは、八王子周辺は桑畑が多く、多くの人(人口は 8,000 人と記される)が養蚕・製糸の何らかの仕事に携わっていることを指摘しています。そして、川原宿からは人力車が確保できなかったようで、只一人徒歩で小仏峠と相模川(馬入川)を超えて、この日の宿泊地である与瀬に至ります。

与瀬からは再び人力車を雇いますが、二人の車夫はひどく酔っていたとのことで、まともに進むことが難しかったとのべています。なんとか桂川の上に架かる猿橋を超えて、この日の宿泊地である大月へとたどり着いています。

大月の宿では、近隣の人々が集まり、ヘンリー・フォールズとの会話を楽しんだようです。集まった人々は、彼が広げた英語版の日本地図をよく理解しており、その背景には当時の日本における言語が均一に維持されていることで地理学的知識が浸透しており、それゆえに兵役や宗教的巡礼の体制が極めてうまくいっているという点があると指摘しています。そして、ここでの会話を楽しんだ後に、旅に持参した薬や書籍を人々にすべて配ったと記しています。



翌日とその翌日の午前中は大月周辺でゆっくりと過ごし、現地の子どもたちの勉強の様子や、岩殿城跡、裕福な養蚕農家で絵画や陶磁器の見学などをおこなっています。この養蚕農家を出立する際には、葡萄を砂糖でコーティングした菓子、いわゆる甲州銘菓の「月の雫」をお土産にもらったようです。

午後からは大月を出発し、夜にはこの日の宿がある上吉田へと至りますが、そこで事件が起こります。宿に向かって上吉田の町を進むヘンリー・フォールズに対して、日本人の若者たちが泥玉を投げつけたのです。さらに、目的の宿では宿泊を拒否されますが、宿の主人にパスポートを見せ、町の役人や警察官に立ち会いを求めることで、ようやく別の宿泊場所を確保することができたのです（ヘンリー・フォールズの訪問前に、フランス軍海軍士官が上吉田を訪れ、そこで何らかのトラブルがあったことが示唆されています）。

こうしたやり取りに加えて、ようやく確保した宿でも、はじめ「夕食がない」と言われますが、ヘンリー・フォールズは、庭で育てているジャガイモを自分で掘るからと頼み込み、なんとか夕食にありつくことができたようです。

こうしたトラブルがありながらも、彼は朝焼けに輝く富士山を見て、富士山を称える多くの言葉を記していることから、深く感動した状況が見て取れます。ただし、ヘンリー・フォールズ自身は、「偉大な山を賞賛するためには、麓にいななければならない」、「富士山に登ることは、富士山の最も最悪な使い方である」と述べており、富士山には登ることなく、その後、上吉田から箱根に向かい、小田原を経て東京へと戻っています。

彼の記録からは、富士山への旅を通して見聞した日本の状況や、当時の外国人と日本人の間に存在した緊張感の一端を知ることができます。また、同時期には外国人による富士登山の記録いくつか残されている一方で、ヘンリー・フォールズは麓で富士山を眺めることを最優先としており、外国人によっても富士山の捉え方というもの異なっていたことを知ることができる貴重な記録といえるでしょう。

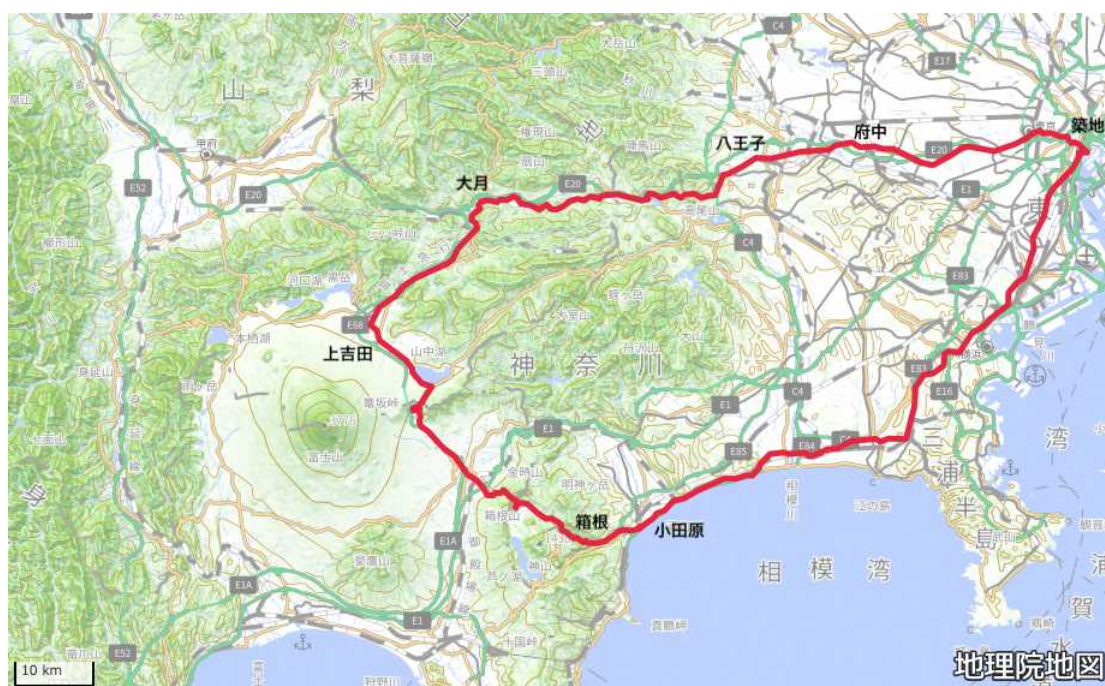


図1 ヘンリー・フォールズの富士山への旅の行程(地理院地図に追記して作成)



参考文献

鈴木力二 1965 『日本盲教育資料集 第1集』 あをい会

重久篤太郎 1968 『お雇い外国人⑤ 教育・宗教』 鹿島研究所出版会

川崎晴朗 1985 「私の築地居留地研究(5)ヘンリー・フォールズについて(上)」『市政』34(6)
全国市長会館

長尾史郎・高畑美代子 2019 「ヘンリー・フォールズ 『ニッポン滞在の9年間ー日本の生活と仕来りの概観』『明治大学教養論集』542号 明治大学教養論集刊行会

長尾史郎・高畑美代子 2019 「ヘンリー・フォールズ 『ニッポン滞在の9年間ー日本の生活と仕来りの概観 [第10章]』『明治大学教養論集』545号 明治大学教養論集刊行会



静岡県富士山世界遺産センター